

岡崎市議会議長 様

支出番号

13

会派名

民政クラブ

代表者名

柴田 敏光



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

## 政務活動旅行報告書

令和 2年 3月27日提出

活動年月日	令和 2年 2月 5日(水)～令和 2年 2月 7日(金)	
氏名	太田俊昭、井村伸幸、井町圭孝	
用務先 及び 内 容	1	用務先 宮城県石巻市
	2月 5日	内 容 東日本大震災からの普及復興について
	2	用務先 岩手県盛岡市
	2月 6日	内 容 食と農のバリューアップについて
	3	用務先 福島県喜多方市
	2月 7日	内 容 小学校農業科の取組について
	4	用務先
	月 日	内 容
備 考		



● 政務調査報告書 (No.473)

委員会・会派名	民政クラブ 太田俊昭、井村伸幸 報告；太田俊昭
視察日時	令和2年2月5日(水)午後2時00分～
視察先・概要	宮城県 石巻市 ・人口：142,766人 ・世帯数：61,587世帯 ・面積：554.55km <sup>2</sup> ・特記事項：水運交通の拠点に位置する「奥州最大の米の集積港」として、全国的に知られた交易都市。金華山沖は世界三大漁場の一つに数えられ、かつお・いわし・さばなどの水産資源の宝庫。「食材大国・石巻」、漫画を活かしたまちづくりが進められています。
視察内容	「東日本大震災からの普及復興について」
選定理由(目的)	・震災後、市民の不安を解消し、これまでの暮らしをどう取り戻したのか。 ・復興の基本的な考え方や今後の復興に関する施策の展開
岡崎市の現状と課題	・南海トラフ地震が想定されている中で本市の在り方を検証するため。
<div data-bbox="181 936 443 1128"></div> <div data-bbox="181 1167 443 1323"></div> <div data-bbox="181 1361 443 1518"></div> <p data-bbox="261 1525 395 1552">▲被災状況</p> <p data-bbox="197 1592 427 1619">視察概要及び評価</p> <div data-bbox="181 1659 443 1805"></div> <p data-bbox="181 1812 443 1888">▲復興政策部地域振興課 野村課長補佐、伊藤主事から説明をいただいた。</p>	<p data-bbox="480 831 639 857">■ 被害概要</p> <ul data-bbox="480 864 1422 1182" style="list-style-type: none"> <li>・平成23年3月11日14時46分、東日本大震災(国内観測史上最大マグニチュード9.0。震度6強)津波の高さ最大高さ+8.6m、</li> <li>・<u>浸水面積73km<sup>2</sup>、※市内の13.2%が浸水。</u></li> <li>・<u>死者3,178名、行方不明者422名</u>(平成27年5月末)、<u>建物被害56,708棟</u></li> <li><u>地盤沈下最大沈降-120cm、最大避難者数50,758人、最大避難所数259箇所</u></li> <li>・災害廃棄物： <u>処理必要推計量428万トン(市の108年分のごみ量)</u></li> <li>・仮設住宅必要数： <u>7,153戸・人数16,788人</u></li> </ul> <p data-bbox="480 1223 1174 1249">■ 復興の実現に向けて(1)石巻市震災復興基本計画</p> <ul data-bbox="480 1256 1422 1496" style="list-style-type: none"> <li>・復興の基本的な考え方や今後の復興に関する施策の展開、地区別の整備方針等、<u>今後10年間(普旧期、再生期、発展期)の復興に向けた道標として策定し推進。</u></li> <li>(指針)             <ol data-bbox="528 1395 927 1496" style="list-style-type: none"> <li>① 災害に強いまちづくり</li> <li>② 産業・経済の再生</li> <li>③ 絆と協働の共鳴社会づくり</li> </ol> </li> </ul> <p data-bbox="480 1536 1118 1563">■ 復興の実現に向けて(2)復興まちづくりの姿</p> <ul data-bbox="480 1570 1422 1888" style="list-style-type: none"> <li>・災害に強いまちづくり： <u>防潮堤(T.P7.2m～3.5m)、河川堤防、避難道整備、津波避難タワー(200人/台・4カ所)津波避難ビル(35カ所)、復興公営住宅整備(4,700戸)</u>等</li> <li>・産業・経済の再生： <u>水産加工団地(120社再開50%)、浜・漁港の復興(44港復旧中)、観光施設整備、共同乾燥調製貯蔵施設(カトリ-ILバ-ター)</u>等</li> <li>・絆と協働の共鳴社会づくり： <u>中心市街地整備、公共医療機関の整備(2施設)学校等教育施設の整備(15の学校、統合・移転・新築)、公園等の整備等</u></li> </ul> <p data-bbox="480 1928 751 1955">■ 復旧・復興事業費</p> <ul data-bbox="480 1962 1422 2063" style="list-style-type: none"> <li>・復旧・復興にかかる主な事業費の総額は約1兆2,259億円(復旧事業3,627億円+復興事業8,199億円+その他433億円)を予定。<u>市の一般会計予算のおよそ20年分に相当。</u></li> </ul>





▲説明を頂いたメンバーと

### ■ 復興への支援

- ・ボランティア支援：  
災害ボランティアセンター（延べ派遣人数 122,000人）、  
NPO等団体支援：受け入れ人数 170,000人超=30万人の方々から支援
- ・他自治体からの職員派遣：  
501自治体 1,360名
- ・義援金（市民に配分）：  
配分件数 132万 1,328件、金額 510億 7,154万円
- ・災害復旧費寄付金：  
受付件数 3,005件、14億 934万円：漁業・水産業・教育等へ活用

### ■ 復興への課題（現在進行中事業）

- ・道路整備：道路 92.1%、橋りょう 30.4%、
- ・下水道施設：污水管 98.4%、雨水管：73.1%

### 【太田】

・東日本大震災から8年、深い傷跡と悲しみの記憶を残すこととなった大震災ですが、震災後、国・県をはじめ、全国の企業や自治体、ボランティアの方々などによる多くの、そして心温まる支援により、復興が進む被災地ですが…視察先の石巻市でも8割（道路整備、下水が残っている）とのこと。

いまだに住宅の再建が進まない在宅被災者は少なくありません。

・将来起こりうる首都直下地震、そして南海トラフ巨大地震。特に、都市部では多くの方が避難所に入れず「在宅被災者」になる可能性が高いと言われています。

・本市においても災害はいつ起こるか、本当に分かりません。目を背けず、できるだけ早く対策を考えていく必要があります。

・最大の被災都市から世界の復興モデル都市 石巻を目指して、市民が一丸となり歩みだしています。本市も参考にしたい。

### 【井村】

平成23年3月11日に発生した大震災により、約3,600の方が亡くなられたり行方不明になり、住家も76.6%が被災されましたが、同年12月には「石巻市震災復興基本計画」を策定し、『復旧期』『再生期』『発展期』と段階的な期間を経て、現在の石巻市に至っているとのこと。

復興公営住宅等が整備され、ピーク時には約17,000人が住んでいた仮設住宅も無くなりましたが、当時はコミュニティの再形成などにも苦労されていたようです。

また、企業誘致のために市が確保していた市有地も最優先で仮設住宅用の用地として提供したことから、産業の復興にも少なからず影響があったとのこと。

被災後9年が経とうとしてますが、下水などのインフラ整備が不十分なところも残っており、あらためて被害の大きさを感じると共に、災害に強いまちづくりの必要性を感じるとともに、仮設住宅の建設用地検討についても進める必要があると感じました。

本市への反映  
(意見・課題など)



● 政務活動視察調査報告書 (No.474)

委員会・会派名	太田俊昭、井村伸幸、井町圭孝	報告者：井町圭孝
視察日時	令和2年2月6日(木)	
視察先・概要	岩手県盛岡市 盛岡市農林部農政課 ・人口 297,631人 ・面積 886.47km <sup>2</sup> ・世帯数 133,152世帯 ・人口密度 328.68人/km <sup>2</sup>	
視察内容	『食と農のバリューアップ』について	
選定理由(目的)	盛岡市の食と農のバリューアップ推進活動について学ぶ。	
岡崎市の現状と課題	岡崎市では、市内で生産された農林産物の品質の向上や市場や消費者から信頼される商品となること、農林業の活性化を図ること等を目的として、様々な農林産物をブランド化推進品目として指定し、市内外に向けてPRを行っている。	
視察概要及び評価	<p>1. 盛岡市の食と農バリューアップ推進事業の特徴</p> <p>(1) 事業推進体制は大きく分けて8つ(生産者、金融機関、行政機関、教育機関、食産業事業者、流通業者、JA、市民)に分けられ、それぞれがバリューアップのための役割を担う。 市民にも参加してもらっていることも特徴の一つ</p> <p>(2) 食と農の魅力発信および農家と様々な人をつなぐプラットフォームとなるウェブサイトを開設。</p> <p>(3) 盛岡美味いもんアンバサダー認定制度を設け、食材、食べ方の認知度UPを図り、美食王国盛岡のイメージ拡大を図っている。</p> <p>(4) 盛岡の食と農のファン組織を発足し、1月末現在502人の会員が登録 ファンクラブ募集方法は、募集カードを配ったり、新聞広告を利用。 また、会員特典を設けたことで会員数が口コミで増加している。 (ビール100円引き、飲み放題30分延長など)</p> <p>(5) もりおかの食と農体験・応援プログラムを企画運営 ファンクラブの会員に案内を出し、産地をめぐるスタディバスツアーの実施や、畑のお手伝いプロジェクトを実施。生産者のこだわり等を学ぶほか、収穫体験、農作業の手伝いを会員に体験してもらっている。</p> <p>(6) マスメディアを活用した情報発信を行うとともに、魅力を発信するリーフレットを年3回発行している。</p> <p>(7) 盛岡産畜産物を美味しく味わうことを目的に、盛岡市に縁のある有名料理人を招聘し食材を楽しむイベントを開催。また、招聘したシェフが講師となって、若手料理人を育成するセミナーなども開催している。</p> <p>2. 現在の課題 今年度までが集中取り組み機関であるが、調査等を踏まえ見えてきた問題点は以下の通り</p> <p>(1) 産地直売所の利用者人数の伸び悩み (2) 全国の消費者を対象とした場合の盛岡産農畜産物の認知度の低さ (3) 若者の盛岡産農畜産物に対する認知度の低さ (4) 人口減少による食市場規模の縮小と、海外貿易に係る各協定発効に伴う輸入品との競争激化</p> <p>3. 今後強化すべき取り組み 戦略と基本的な方向性を変えることなく、より効果的に問題点にアプ</p>	



- ローチするため、以下の取り組みを強化していく
- (1) 盛岡産農畜産物と食関連産業を繋ぐ流通の強化
  - (2) 人口減少に伴う食市場規模縮小を見据えた県外・国外への販路拡大
  - (3) 将来を担う若者の事業に対する理解や参画の促進



ご説明いただいた農政課主幹兼室長 山本様と

【井町】

様々な団体や人を巻き込んで、食と農をバリューアップさせるための活動に取り組んでいる。

若者への認知度は低いようだが、市民を巻き込んだ活動は岡崎よりも進んでいると感じた。

特にファンクラブを立ち上げ、農業の手伝いや体験をしてもらう取り組みは、岡崎市の担い手も人手不足に悩まされているところが多いと聞いているので、このような制度を上手く利用できるのではないかと考える。

消費者が農業を手伝う取り組みを盛岡市などの取り組みを参考に、本市にも提案していきたい。

【太田】

- ・盛岡の特産食材である盛岡リンゴ、津志田芋、アロニア、行者ニンニク、黒平豆、もりおか短角牛など独自のブランド産があり、盛岡の美味いもんアンバサダー認定制度、「美食王国もりおか」ウェブサイト開設、ロゴマークの開発など様々なイベントを開催しています。

- ・集中取り組み機関の検証する中で見えてきた問題点(弱み)を今後強化すべき取り組みとして「もりおかの食と農バリューアップ推進戦略」の一部を改訂しPDCAのサイクルを回しています。

- ・本市にも農業と農産物に対しての情報発信が不足しているのか認知度が低いことが課題である盛岡市の取り組みを参考にされたい。

【井村】



周囲に全国的にも有名な食材が目白押しな東北において、盛岡市では生産地でありかつ消費地でもある地域特性を活かし、地産地消をベースとした

本市への反映  
(意見・課題など)

付加価値の増大を図りつつ「農家所得の向上」や「食関連産業の活性化」に力を入れられている。特にまだまだ認知度の低い、盛岡の特産食材など独自の食材を周知するためにアンバサダーの認定制度やロゴマークの開発、ウェブサイトの開設、さらにはファンクラブを立ち上げなど、消費と交流の機会を創出することにも力を注がれており、認知度向上の努力がうかがえた。本市においてもまだまだ認知度の低い食材はあり、盛岡市で取り組まれている制度などを参考に、今後の農業従事者の担い手不足などの課題解決に結び付けられればと感じた。



● 政務調査報告書 (No.475)

委員会・会派名	民政クラブ 太田俊昭、井村伸幸、井町圭孝 報告：井村伸幸
視察日時	令和2年2月7日(金) 午前10時00分～
視察先・概要	<p>福島県喜多方市</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人口：49,343人 ・世帯数：18,591世帯 ・面積：554.63km<sup>22</sup></li> <li>・特記事項：会津盆地の北部に位置し、東に磐梯山、西に飯豊山を望む豊かな自然が広がり、田園と蔵が美しいまち。全国的にも珍しい「バルーン体験」など観光資源に恵まれた観光都市。喜多方ラーメン、三都そばは全国的にも有名。</li> </ul>
視察内容	「喜多方市小学校農業課」について
選定理由(目的)	全国各地で当然のこととして行われてきた農業は、農業従事者だけでなく多くの子ども達にとって日常的に見られる風景であり、その中から様々なことを学び心を育んできた。現在では農業の現場を直接見たり係わったりする機会が少なくなったことから、心の情操教育の一環として農業を授業に取り入れている喜多方市を視察する
岡崎市の現状と課題	農業従事者の高齢化、担い手不足、耕作放棄地の増加等の問題は、本市においても課題である。加えて、子ども達にとっても農業活動を通じて農作物の生産現場を直接見たり係わったりすることで、様々な生き物との共生や思いやりを醸成するうえで必要な機会が失われている。
<p>視察概要及び評価</p>  <p>▲ご説明いただいた喜多方市教育委員会 学校指導課 齋藤様(左)、山中様(右)</p> 	<p>&lt;小学校農業科設置の背景&gt;</p> <p>【導入経緯】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・約30年前から「総合的な学習の時間」で稲を育てる活動を継続</li> <li>・JT生命誌研究館館長から「コンピュータで株を学ぶより、<b>畑でカブを育てるべきだ</b>」の提唱あり</li> <li>・「農業を核にした地域コミュニティづくり」への市長の思い</li> </ul> <p>⇒<u>小学校農業科がスタート</u></p> <p>【喜多方市の児童の特色】</p> <p>平成18年に「児童生徒の農業に関するアンケート」を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭で作物を栽培(64%)</li> <li>・栽培活動が好き(71%)</li> <li>・栽培活動が嫌い(7%)</li> </ul> <p>⇒児童の農業に対するイメージはプラス⇒<u>学校教育に生かす</u></p> <p>【農業のもつ教育的効果】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生命(いのち)について学ぶ</li> <li>・共生や思いやり、環境について学ぶ</li> <li>・ゆとりある取り組みの中で持続性や耐性を育てる</li> <li>・想像力や判断力、実践力を育てる</li> </ul> <p>⇒<u>教育課題解決のための一つの方策</u></p> <p>&lt;喜多方小学校農業科のあゆみ&gt;</p> <p>平成18年11月 小学校農業教育特区の認定を受け、全国初の教科としての「喜多方市小学校農業科」を設置</p> <p>平成19年 4月 3校で小学校農業科の授業開始</p> <p>平成20年 4月 さらに6校で小学校農業科の授業開始</p> <p>平成20年 7月 小学校農業教育特区の認定取り消し後、教育課程特例校の指定を受ける。「小学校農業科」は継続</p> <p>平成21年 3月 教科としての「農業科」廃止</p> <p>平成21年 4月 総合的な学習の時間(年間35時間)として</p>



14校で実施  
平成22年 4月 総合的な学習の時間（年間35時間）として  
15校で実施  
平成23年 4月 総合的な学習の時間（年間35時間）として  
17校全校で実施

<喜多方小学校農業科のねらい>

「なすことによって学ぶ」精神に基づき、農作物の実体験活動を重視した教育を展開

(1) 豊かな心の育成

- ・農業においては、農作物は単なる食物ではなく、「いのちあるもの」であり「人のいのちをつなぐ大切なもの」であることを学習
- ・「いただきます」や「もったいない」など日常生活の中で使われている言葉の意味について考えさせ、人として必要な感謝の気持ちや慈しみの心を育てていく
- ・農業活動という直接的な体験を契機に、様々な面から児童の暮らしぶりを見つめ直させ、豊かな心の育成を図る

(2) 社会性の育成

- ・種まきから調理・加工までの一連の活動を通して学習を進め、徐々に成長する作物を通して、自分にとってかけがえのない物であり、そのいのちは自らの手に委ねられていることを学ぶ
- ・このような環境下で、児童は自分の責任を自覚し、農作物を育てることを通して、成果を得るためには時間がかかり、得られる結果は児童一人ひとりの努力がそのまま形となって現れるものであることに気づく
- ・児童に責任感を持つことや努力することの必要性を徐々に気づかせ、目標に向かって取り組むことの大切さを理解させ、現代の児童に欠如しがちな社会性の育成を図る

(3) 主体性の育成

- ・より良い作物を収穫するためには事前に栽培作物について調べることが必要であり、その時々々の作物の様子をよく観察し、疑問点を調べたり専門家の指導を受けることが必要。
- ・一定の目標を設定し計画をたてて取り組み、その時々々に必要な対応策を考える過程には、今求められている主体的な学習意欲や取り組む態度が必然的に育成される

<喜多方小学校農業科の目標>

- (1) 農作業の実体験を通して、自然の係わり合いの複雑さについて理解し、他の生き物と共存することの大切さを理解することができるようにする
- (2) 農作業の実体験を通して、食べることの意味を理解し、生命の大切さを理解できるようにする
- (3) 農業に必要な気象、土壌、生物などの基本的な知識を習得すると共に、将来を予測し、計画的に農業に取り組むことができるようにする

<小学校農業科と地域社会の関わり>

祖父母や JA の青年部など学区の農業従事者が農業支援員（教育委員会が委嘱）として指導

⇒小学校3年生～6年生の児童が本格的な農作業に取り組む

- ・農業活動を通して、農作物の成長していくことを実感
- ・農作物が単なる食べ物でなく「生きるもの」であることを理解
- ・「いのちといのちの関わり合い」や「いのちの大切さ」について理解を深める



本市への反映  
(意見・課題など)

【井村】

学校現場において「豊かな心の育成」「個に応じた教育」「授業の質的改善」が求められているいま、「土を耕し、種をまき、いのちを育み、いのちをつなぐ」という人間にとって最も基本的な活動である農業は、半世紀前までは都市部を除き、全国各地で当然のこととして行われており、多くの子どもたちはその日常的な風景の中から様々なことを学んできたことを考えると、本市においても農業の持つ教育的効果をあらためて検討してみるにはどうかと感じた。

【太田】

現在、児童・生徒規範意識や社会性の希薄化、不登校の増加、自律心や学ぶ意欲の低下、生活習慣の乱れなど、次代を担う生徒を取り巻く問題が深刻化し、社会全体に大きなかけを落としている。学校現場においては様々な取り組みをされ成果は上げているものの根本的な解決には至っていない。

土を耕し、種をまき、いのちを育み、いのちをつなぐという農業のもつ教育的効果を児童・生徒が体験することが大切であり、本市に於いても参考にすべき事例である。

【井町】

農業を通じて、地域の方々との交流をはじめ、生命の大切さ、感謝すること、集団行動、農作業などを学び、さらに取れた作物を使って料理まですることで自然界の循環まで学ぶことが出来ている。

学年全体で最初から最後まで育て、それを食べるまで、さらに今後は売ることまで学校の授業で学べることは非常に多くのことが学べる素晴らしい授業であると感じた。

喜多方市のように大規模には本市で行うことは難しいが、岡崎市でも田植えや稲刈り、芋ほりなど農業体験をスポット的に行っている学校もあるので、喜多方市の事例を参考に、農業体験を通じてもっと多くのことが学べるように、議会を通じて提案していきたい。